

## 日本語教育センター活動報告 2020・2021年度\*

錢坪玲子・井田貴子・坂田昌子・山下美千子\*\*

Center for Japanese Language Education : Annual Report on Research activity 2020-2021

Sachiko ZENITSUBO, Takako IDA,  
Akiko SAKATA, Michiko YAMASHITA \*\*

### 1. 日本語教育センター概要

日本語教育センター（以下、センターと表記）は、2021年9月現在、現代社会学部の教授会の下に各学科及び各委員会と並列に位置する組織である。2018年4月1日に設置された。設置当初は、教授1名・准教授1名・特任助教2名の計4名で構成されていたが、2020年度に准教授1名・特任助教3名となり、2021年度には教授1名・准教授1名・特任助教3名の5人体制となった。外国語学科教員4名と基盤教育センター教員1名が兼任している。

本学留学生には、学部生以外に、日本語教育プログラム生<sup>1</sup>、交換留学生、私費留学生がいる。日本語日本文化体験プログラム（短期研修）で本学を訪れる留学生もいる。これらの留学生を対象とした日本語科目の運営を担当しているのがセンターである。

本学の交換留学海外協定校には、テネシーウエスレヤン大学（アメリカ）、バギオ大学（フィリピン）、アジア・スカラーズ大学（タイ）、フォン・コマーシャル&テクニカル・カレッジ（タイ）、ピラシカバ・メソジスト大学（ブラジル）、フレイザーヴァレイ大学（カナダ）、山東外国語職業技術大学（中国）、長栄大学（台湾）、大邱大学（韓国）、慶南情報大学（韓国）、仁徳大学（韓国）がある。

鎮西学院大学ホームページ<sup>2</sup>によれば、本学留学生数は以下の通りである（2020年5月1日現在）。1年生40名、2年生36名、3年生34名、4年生12名、交換留学生4名、計126名。その他、日本語教育プログラム履修生は85名である。学部の在籍学生数は475名であるため、留学生が占め

る割合は3割弱である。学生数は年によって増減があるが、2020年度の日本語教育プログラム生は約230名（前期後期の合計）を見込んでいたところ、新型コロナウイルスの感染拡大により、実際には1名のみ入国・受入れとなった。

### 2. 日本語科目の運営

日本語クラスは日本語レベルに応じて、日本語初級Ⅰ、日本語初級Ⅱ、日本語中級Ⅰ、日本語中級Ⅱ、日本語上級Ⅰ、日本語上級Ⅱの6つを設けている。日本語初級Ⅰと日本語初級Ⅱには、総合、聴解、文字・語彙、会話、読解の5科目がある。日本語中級Ⅰ・中級Ⅱ・上級Ⅰには、総合、聴解、文字・語彙、文法、読解の5科目がある。日本語初級Ⅰから上級Ⅰまで、それぞれ週12コマ×15週×5クラスとなり、合計900コマ（60単位）である。さらに、上級Ⅱのビジネス会話、読解、文章作成法の3科目（週3コマ×15週）を加えると、1学期で945コマ（66単位）をセンターが担当していることがわかる。専任5名に加えて、日本語科目担当の非常勤講師約10名がこれらの授業を担当している。履修生は学部生をはじめとして、交換留学生や私費留学生、日本語教育プログラム生等の様々な属性をもつ留学生であり、クラス分けは属性によってではなく、日本語レベルによって行われる。

日本語科目としての円滑な運営を目的とし、「日本語科目運営要領」及び「試験実施要領」をセンターで作成し、毎学期改訂したものを担当教員間で共有している。また、クラスごとのファイルを作り、担当者は授業終了後にファイルに授業報告を記載し、次の担当者にはメールでその日の

\* Received October 1, 2021

\*\* 鎮西学院大学 現代社会学部 外国語学科 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

授業報告をするなどして、クラスの担当者間での情報共有を図っている。学期前後には、非常勤講師を含めた日本語教員でミーティングを行い、授業のふりかえりや運営要領等の確認、今後の課題等についての検討などを行っている。

毎学期、新しい留学生の日本語レベルをチェックするためにプレースメントテストを実施しているが、文法のみを選択問題でマークシート方式を採用しており、自動的に採点できるような専用ツールを用いている。

学期末には、学生ごとの伸びを測ることができるよう、各クラスで共通の期末試験を実施している。期末試験は、日本語能力試験（JLPT）のN1～N5レベルの文法試験であり、全100問のマークシート方式の試験である。結果は即座に学生にフィードバックされ、かつ、センターにも個人データとして蓄積され、学生指導の際に役立てられている。

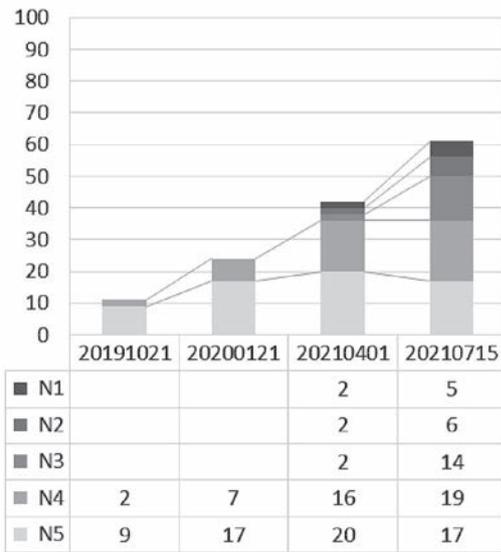


図1 学生Aのプレースメントテスト・期末試験結果の伸び

また、センターでは、日本語能力試験（JLPT）の受験指導も行っている。留学生のキャリアパスにとって最適な受験を実現するため、学生の現時点での日本語レベルに応じた受験指導を行うことを心がけている。基盤教育センターや留学生センターと連携し、本センターが作成した受験推奨レベル一覧に基づいた受験指導と受験料補助を2021年には実現することができた。

その他、留学生関連の学内外のイベント（日本語スピーチコンテスト、留学生の祭典、カントリーデー等）の企画運営、大学広報（大学ホーム

ページでの連載記事）等の業務も担当した。2021年には、公益財団法人長崎県国際交流協会主催の日本語弁論大会に留学生2名が参加し、いずれも入賞を果たした。

### 3. 日本語教師養成課程の運営

センターは留学生の日本語教育関連業務をおもに担当する部署であるが、センター長が日本語教師養成課程も担当していることから、日本語教師養成課程の履修生と留学生との協働にも力を入れている。

日本語教師養成課程所定科目のうち26単位を取得すれば、本学卒業時に「日本語教師養成課程修了書」が発行される。いわゆる副専攻課程に相当する課程である。所定科目のうち、必修科目は3科目（6単位）、日本語教育論、日本語教授法、日本語教育実習である。近年、日本語教師の公的資格化が検討されていることから、履修生が急増しており、2020年度の日本語教育論の履修生は32名、日本語教授法は20名、日本語教育実習は13名であった。2021年度は日本語教育論37名、日本語教授法と日本語教育実習は13名、10名である。履修生のほとんどが日本人学生であるが、なかには留学生や社会人科目等履修生も一定数いる。社会人科目等履修生には、元（現）教員で、日本語教師資格を取得希望している人や主婦等、多様な学生がいる。2020年には、日本語教育実習の教壇実習として、協定校の一つである中国重慶大学日本語科の学生たちにオンライン授業を提供するなどした。

### 4. コロナ禍における取り組み

#### 4-1. 遠隔授業

2020年4月、通常であれば、多くの留学生が来日し、キャンパス内がにぎやかになる時期であるが、新型コロナウイルス感染症の影響で、海外から来日する新規留学生は一人もいないという事態に本学も直面した。とはいえ、前年より日本語教育プログラムに在籍している留学生がいたため、あわせて約130名が日本語科目を履修した。新規の来日を予定していた約120名は入国延期となった。

年度開始当初、本学では遠隔授業の実施は推奨されていなかったが、センターは留学生特有の事情を鑑み、他科目に先行して、第1回目の授業からすべての科目を遠隔授業（リアルタイムの双方向型を含む）に切り替える決断をし、早くから準

備に着手していた。2019年度末、新型コロナウイルスが国内で猛威をふるい始めた頃、センターはZoomやGoogleドライブ等を用いた遠隔授業について連日学び合い、実施方法の検討を集中して行うなどした、準備を整えていた。

4月のオリエンテーションは対面で行われたことから、大学Gmailアカウントを持たない日本語教育プログラム生全員に一般Gmailのアカウントを新規作成してもらい、Googleドライブ等を使用できるようにした。2020年前期の授業は、ZoomとGoogleドライブ、Gmailを用いて運営したが、ほとんどの教員はZoomやGoogleドライブを使用した経験がなかったため、センターが独自に作成したマニュアルや資料を非常勤講師に配布し、Zoomミーティングを複数回立ち上げ、実際にデモンストレーションをするなどして、教員全体のスキル向上に努めた。2020年後期からは、Google Classroomも導入し、クラスごとの管理やGoogle フォームによる課題提出、即座のフィードバック等が可能となった。

未知のウイルスとして我々の社会を突然襲った新型コロナウイルスについて、当時、感染ルートや予防法等、解明されていないことがあまりにも多くあった。脅威のウイルスから留学生を守るために、センターは当時の最先端のツールをいくつも比較検討し、ネット環境やその他の側面で制限が少なくない本学でも利用可能なものを取捨選択し、実施に踏み切ったという経緯があった。本学留学生はルームシェアをして暮らしている学生が少ないため、一人でも感染者が出た場合、感染が急拡大しかねないという懸念を当時から強く持っていた。遠隔授業の導入と実施のため、昼夜問わず作業に携わったのは、まずは留学生、そして、日本人学生、さらには、本学教職員とその家族、ひいては、大学が位置する地域の人々を守りたいという気持ちからであった。

コロナ禍での遠隔授業は、心身共に大変な労力を求められるものであったが、結果からすれば、当初思いもなかったようなデジタル化の恩恵を受けることとなった。まず、これまで紙ベースだったあらゆるものがデジタル化した。例えば、講義日誌、出席簿をGoogleスプレッドシートに変更し、毎度印刷して配布・回収していた小テスト等をGoogle Classroomに移行することができた。学生へのフィードバックや連絡等もGoogle Classroomで行うことが可能となった。

また、同時期、初級の文型導入用の動画作成に

もセンターとして着手した。コロナ前から、本学では毎学期、1か月以上の入国遅れが常態化しており、学期途中で授業に参加する学生の学習の遅れが問題となっていたからである。来日前あるいは来日後にこれらの動画を活用し、各学生に学習してもらうことによって、この問題は解決するかもしれないという期待がある。今後は、これらの動画を活用して反転授業<sup>3</sup>を実施することも検討中である。反転授業を導入することができれば、授業中、アウトプットに多くの時間を充てることが可能となり、留学生の日本語運用能力をさらに向上させることが可能となる。

#### 4-2. 日本語スピーチコンテスト（オンライン）の開催

学内の日本語スピーチコンテストは例年行われていたが、2020年は初めての試みとして、日本語教師養成課程科目と紐づけし、日本語教師を目指す学生と留学生でチームを作った。日本語教師養成課程の学生が、スピーチで用いる日本の歌<sup>4</sup>の選択、スピーチ原稿の作成、スピーチの指導等を担当した。コロナ禍におけるスピーチコンテストだったため、これまで通り、学内施設で実施することはかなわなかった。そこで、代わりに留学生のスピーチを録画したものをYouTubeで限定公開し、学内の教職員、学生たちにURLを送信し、各自見てもらった。その後、もっとも良いと思ったスピーチを1つ選び、投票してもらったが、投票もGoogleフォームを利用し、オンラインで入力してもらう形式で行った。表彰式は、大教室で距離を保ちながら対面で実施し、上位3名の留学生を表彰した。初めてのオンラインによるスピーチコンテストだったため、改善点も少なかったが、センターとしては多くの示唆を得ることができた。表彰式で喜ぶ留学生たちの姿を見ることができたことが何よりの収穫であった。コロナ禍での中止を即断するのではなく、いかにして実行可能かについて試行錯誤した結果だと思われる。

#### 4-3. その他の取り組み

その他、コロナ禍で新たに取り組んだものをいくつか紹介したい。まず、アルバイトによる収入が激減した留学生も少なくなかったため、留学生のための支援物資を呼びかけ、食料や生活用品等の配布を行った。次に、センターのInstagramを新設し、未入国学生にも本学の情報が発信できるように努めた。さらに、大学の長期休暇期間に、

Google Classroomを利用して、日本語講座を開設した。レベルや科目に応じて、クラスを作成し、Google Classroomで課題の提出やフィードバック等を行った。最後に、本学留学生全員をメンバーとしたGoogle Classroomを作成し、様々な情報を共有、提供できるようにした。例えば、大雨や台風、地震等の情報や河川氾濫や避難所に関する情報を随時アップし、留学生からの質問を受け付け、すぐに返信することによって、情報弱者として不安を抱きやすい留学生に支援の手を差し伸べやすい環境を作ることができたと思う。

## 5. 今後の課題と展望

2020年、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、日本語科目も遠隔授業をせざるを得ない状況に陥った。当初、センターの日本語教員は、慣れないツールの利用に試行錯誤しつつも、デジタル化の波を率先して受入れることにより、結果としては、業務の効率化や学習環境の改善等、大きな収穫を得ることができた。今後は、コロナ禍の継続いかんにかかわらず、センター業務のデジタル化をさらに促進させるとともに、教授法の改善や教員のスキル向上のための取り組みを引き続き行っていきたい。

## 注

1. 日本語教育プログラムとは、科目等履修生として、1年間日本語を学ぶプログラムのことである。
2. 鎮西学院大学ホームページ、<https://www.wesleyan.ac.jp/about/basic.html#a04-01>  
(最終閲覧日：2021年9月30日)
3. 反転授業とは、例えば、授業前に学生に新しい文型等の導入用の動画を見てもらい、授業時間には、それらの内容の確認や練習、応用の時間にあてるような形式の授業のことである。
4. 2020年度の日本語スピーチコンテストでは、「日本の歌」の歌詞を読み上げる形式にした。